

琉球諸島考古学文献散歩（2）

Book Review on Ryukyu Archaeology （2）

安里 嗣淳
ASATO Shijun

文献

- 鳥居龍蔵 1894 「琉球ニ於ケル石器時代ノ遺跡」
『東京人類学会雑誌』 9巻94号 東京人類学会
1894 「琉球諸島女子現用ノはけだま及ビ同地方掘出ノ曲玉」
『東京人類学会雑誌』 9巻96号 東京人類学会
1905 「沖縄諸島に住居せし先住人民に就て」『太陽』 11巻 1号
1905 「沖縄諸島に住居せし先住人民に就て」
『東京人類学会雑誌』 20巻227号 東京人類学会
1905 「沖縄諸島の先住人民に就て」 『考古界』 4巻 8号
1905 「八重山の石器時代の住民に就て」 『太陽』 11巻 5号
1926 「沖縄本島に居住せし先住民に就いて」
『有史以前の日本』 改訂版 磯部甲陽堂
1926 「八重山の遺跡に就いて」 『有史以前の日本』 改訂版 磯部甲陽堂
1953 「私と沖縄諸島」『ある老学徒の手記』 朝日新聞社刊

注 『有史以前の日本』の初版は1918年であるが、手元になく紹介できない。

鳥居龍蔵という人—生い立ちから東大人類学教室就職まで

1904年6月、東京大学人類学教室の鳥居龍蔵は8年ぶりに沖縄諸島を訪れて2カ月にわたる長期の考古学調査をおこなった。この調査は鳥居にとってだけでなく、沖縄にとっても本格的な考古学研究が実施された初めての出来事であった。2004年は鳥居の調査から100年目にあたるが、それは沖縄考古学研究開始100周年でもあるといえる。このときの調査の成果は翌1905年に『太陽』、『東京人類学会雑誌』、『考古界』に相次いで発表された。三誌ともほとんど同じ文章である。また同年暮には『太陽』に八重山調査の成果を発表している。これは同誌の年初1号の論文中で予告されていたものである。

鳥居龍蔵は東アジアの人類学研究を、実際に自ら現地を踏査して展開した世界的なフィールドワーカーであったと評価される先覚者である。その鳥居が沖縄にも関心をもって、今から百年前の交通不便な時代に沖縄本島だけでなく宮古島、石垣島、与那国島までも踏査したのである。しかも鳥居は後述するように、限られた日程と情報のなかで、今日では定説となっている南北琉球先史時代の系譜と文化圏の相違を、すでにこのときに指摘しているのである。沖縄考古学研究の開始と進展に一つの道筋をつけたその功績は偉大である。

鳥居龍蔵は1870（明治3）年4月4日に、現在の徳島県徳島市で生まれた。もともとの呼び方は「りょうぞう」だったが、東京大学人類学教室に勤務後英文職員録に「RYUZO」と記して以来「りゅうぞう」と称するようになったという。生家は徳島市の問屋街にあった江戸時代からの商家で、裕福な家庭に育ち幼少時から自由気ままな生活を好んだ。小学校に入ると、自由気ままにできない所だと

して興味をもたず、あまり学校へ行かなかったののでついには退学となった。しかし現在よく見られる登校拒否や怠学ではなく、むしろその反対で、その旺盛な好奇心、向学心を發揮して自宅に居ながら実に多くの書物に接して勉学に励んでいる。裕福であったから、書籍をよく買い、東京から取り寄せるほどの読書家であった。また、多くの中学教師や知識人の所へ出入りして、独自に基礎的な学問を修めている。したがって、鳥居は一般の学校生徒よりも、目的意識を明確にもち自由な最前線の学問への道を歩んでいたといえる。

16歳(1886年)のとき、その読書のなかで雑誌『文』に接し、「東京人類学会」が結成されたことを知り、すぐに入会した。送られてくる『東京人類学会報告』を待ちわびて読む傍ら、自らも徳島の史跡を調べて同誌に寄稿するようになった。また同会は前回の(1)で記したように、東京大学大学院生の坪井正五郎が中心となって結成され、後に神田孝平が会長に就いたのであるが、鳥居は坪井に手紙を送って知己を得、以来文通で指導を受けるようになった。また、この頃郷里の恩師が東京へ出張する際に「坪井先生に会い、人類学の勉学に重要な本を紹介してもらい買って来て欲しい」と頼み、神田孝平の『日本太古石器考』を手に入れている。

18歳(1888年)のとき、東大学生の坪井正五郎が九州調査の帰途徳島の鳥居家を訪問した。鳥居家に数日滞在し、付近の史跡を案内したが、坪井は鳥居に東京で人類学を勉強することを勧めた。

20歳(1890年)の9月に、鳥居は東京遊学のため上京した。居候先が郷里の先輩の国学者宅で東京帝室博物館の職員であった。その縁で同館の陳列品を詳しく見る機会に恵まれた。また、神田孝平を訪ねて親交を深めたりした。しかし、頼りの坪井正五郎は当時欧州留学中であった。1892年夏、坪井が帰国すると東大人類学教室で勉強するように勧められた。そこで同年12月鳥居家は徳島の家財をすべて売り払い、一家で東京へ移住した。これは次第に家運が傾き、また長兄は知的障害者、龍蔵はまったく商売に興味がないという状況のなかで、もはや家業の継続発展は望めないと両親が判断したのであろう。

23歳(1893年)のとき、鳥居は坪井の計らいによって東京帝国大学理科大学人類学教室標本整理掛として採用された。鳥居の精力的な勉学は東大でいっそう拍車がかかる。彼は人類学教室初代教授となった坪井の講義をはじめ、各方面の教授の講義を聴講しまくりに、学識を広めていった。坪井の特別の許可によるものである。そして、関東地方の遺跡遺物に関して現地調査を実施したり論考を発表したりした。

沖縄の考古学に関する初の論考

採用2年目の24歳(1894年)のとき、早くもわが沖縄の石器時代遺跡の存否に関する論考を発表している。それが「琉球ニ於ケル石器時代ノ遺跡」『東京人類学会雑誌』9巻94号 東京人類学会刊である。この論考は沖縄から西國男が上京の際に持ってきたものを実見し、「琉球ニ石器時代ノ遺跡アラントハ吾人ノ深ク信ズル所ナリ」との見通しを得、未だ確認されていない沖縄の石器時代遺跡が確かに存在することを示す証拠として論述している。西は八重山諸島で6箇所、沖縄本島で2箇所から石斧を採集し、うち八重山採集の4個を持参して鳥居に見せている。論考のなかで鳥居が片刃石斧に触れ、本邦では殆ど例がないとしたことについて、掲載誌の編集者が注を付し、北海道などにあるとして鳥居の見解を否定的に補っている。しかし、鳥居は八重山地方に顕著な局部磨製石斧にも気付き、また台湾も含めた周辺地域との関連調査の重要性を早くも説いている。

はけだまと曲玉についての論考

同じ1894年に鳥居は「琉球諸島女子現用ノはけだま及ビ同地方掘出ノ曲玉」『東京人類学会雑誌』9巻96号 東京人類学会刊を発表している。特に宮古島で現用されている竹製の管形はけだまについて論述し、はけだまは即ち掛け玉であるとした。またかつては竹玉の間に一定間隔で曲玉があったものが次第に数を減じ、竹管だけになったものと述べている。そして琉球諸島で管玉が発見されていないことに関して、これは現在も昔も竹製の管玉を使用してきたのではないか、さらには日本の古墳から出土する管玉もその起源は竹玉にあるのではないかと説いた。後半は曲玉にふれている。西常央（にし・つねのり）が持参した78個の八重山収集の曲玉について分類を試みている。しかし、その経緯や日本の曲玉との異同は今後の研究課題だとしている。西は長崎県平戸の出身で、1880年に警部兼検事補として来県、1884年に島尻役所長、翌1885年から1890年まで八重山役所長となり、次いで首里役所長兼中頭役所長を1896年まで務めた人物である。曲玉は八重山在職中に収集したものであると記している。西は沖縄の自然と文化に関心を示し、外来の研究者への便宜も図っている。また東京大学に沖縄の生物標本を寄贈したりしているが、曲玉78個を持参したのもこのような関係のひとつであろう。

鳥居が宮古のはけだまを扱った経緯が興味深い。当時、宮古島では長期にわたって島民を苦しめた過酷な税制（いわゆる人頭税）の撤廃運動が燃え上がり、1893年11月に指導者の城間正安と中村十作に連れられて島民代表の二人が上京してきた。その二人すなわち西里蒲と平良眞牛を、しばしば東大に出入りしていた田代安定が鳥居に紹介したのである。鳥居は二人から宮古の習俗を聞き取り、後で「はけだま」の実物を送ってもらい、これを題材に上記の論考を発表したわけである。鳥居の論考には末尾に「余ハ本篇ヲ草スルニ際シ坪井正五郎、田代安定二氏ノ注意ヲ得、且ツ宮古島土人平良眞牛、西里蒲二氏ニ就テ同島ノ事情ヲ聞クヲ得タルハ余ノ深く此処ニ於テ謝スル所ナリ」と記しているだけであるが、1953年の「私と沖縄諸島」『ある老学徒の手記』朝日新聞社刊では「(田代)先生の紹介により宮古島よりわざわざ請願に上京した島人二人の方と知るところとなり、この両氏によって宮古島の土俗を知った」と記している。この二つの記述および年代から、当時の税制撤廃運動の島民代表の二人であったことは明らかである。鳥居は意外なところで宮古島の民衆運動指導者との関わりをもっていたのである。

台湾調査を田代安定と、帰途に沖縄立ち寄り

ところで、東大人類学教室に出入りしていた田代安定とは鹿児島県出身で郷里の私塾で博物学（主に植物学）などを修め、1874年に上京して内務省御雇・博物館掛となった人である。一時帰郷して県に勤めるが、1882年に農商務省に勤めキニーネ試植の目的で沖縄への出張を命ぜられた。田代は専門の植物学以外にも沖縄の土俗などに関心を示し、その見聞を「東京人類学会雑誌」に寄稿したりしている。彼は1887年に「本島旧跡古墳即チ古代人住居ノ形跡誠ニ少ク大抵中古即源為朝並島津家征討以後ノ事ノミニテ甚ダ残り多シ古跡モ普ク実験致シ候所只人骨ノ外何モ参考品無之候」と古代遺跡の発見には悲観的な報告をしているが、巫女などが曲玉を所持していること、計算や記録に結縄算の習俗があることなどを報告している。（「人類学上ノ取調ニ付キ沖縄ヨリノ通信」『東京人類学雑誌』2巻16号、東京人類学会刊）。琉球諸島としては神田孝平が奄美の赤木名採集の丸ノミ石斧の報告が初めてであるが、沖縄諸島としては田代のこの報告が最初の考古学的文献ということになる。また1889年には西表島古見村で発見されたパナリ焼を見取り図付で報告している。「琉球西表島古島村ノ土器」『東京人類学会雑誌』、東京人類学会刊。沖縄考古学初の考古学的図面である。このような関わりから、田代は同学会の事務局である東大人類学教室を訪れることがあったのだろう。1896年の鳥居の第

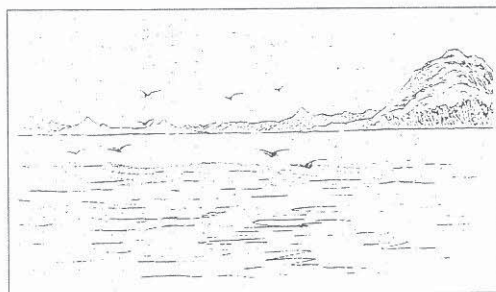
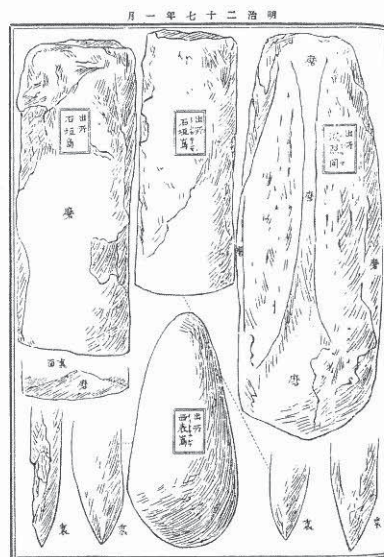
1 回台湾調査の際には東部地域と一緒に旅行している。おそらく田代の薦めや影響があつてか、鳥居はこの台湾調査からの帰りに沖縄に立ち寄り、数日間沖縄師範学校博物学教諭黒岩恒宅に滞在して調査をしている。ただ、どのような調査内容かは特に報告をしていないのでよくわからない。本稿の冒頭にいう「鳥居龍蔵は8年ぶりに沖縄を訪れて云々」はこの年からの経過を指している。

ところで1896年に沖縄人類学会が結成された記事が『東京人類学会雑誌』12巻132号に掲載されている。その発起人中に鳥居龍蔵、黒岩恒の名が見えるが、これはおそらく鳥居が台湾からの帰途沖縄に立ち寄り、黒岩恒宅に滞在していたことと関係があるものと考えられる。黒岩は同年に沖縄学術研究会の設立も準備しているので、この沖縄人類学会の設立にも主導的役割を果たしたものとみられる。会の事務所を黒岩の勤務先である師範学校内におくと規約に定めてあることから、それがうかがえる。鳥居が『人類学雑誌』に沖縄にも石器時代遺跡の存在する可能性があるとの論考を2年前に発表したこと、本人が沖縄に見えたことなどで、同会結成の機運ができたのであろう。



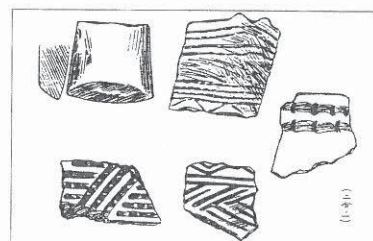
鳥居龍蔵

鳥居が沖縄に石器時代遺跡が存在することを確信した石斧
(一八九四年の論文より)



海上より川平村を望む
(遠方に飛ぶ鳥の下は遺跡也)

石垣島川平貝塚遠望スケッチ
(1905年の論文より)



自ら採集した沖縄本島の先史土器
(荻堂貝塚か?)

1904年、初の本格的沖縄考古学調査

冒頭に記したように鳥居の初めての本格的な沖縄考古学調査は、1904年6月～7月の間沖縄島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島の踏査旅行である。鳥居は台湾調査で初めてこの世界に持ち込んだ写真機を持参し、沖縄の風物も含めて貴重な記録を残している。また、本人も自費しているように初めて蓄音機（レコーダー）を持参して民謡などを録音している。それは東大人類学教室に保管されていたが、鳥居はおそらく大震災のときに消失したのではないかという。

鳥居の沖縄行きの前に、先述したように田代安定によって情報と関心を与えられていた。鳥居は東大の理科大学人類学教室に属していたが、その学問的向上心から文科大学の上田萬年教授の言語学の

講義も聴講していた。ちょうどそこには沖縄出身の伊波普猷が学生として聴講しており、互いに話し合い、鳥居の自宅にも来るような付き合いになった。実は鳥居は当時の東大総長渡辺洪基から、沖縄の考古学調査もすべきことを数年前に言われていた。ちょうど学生伊波からの勧めもあり、しかも琉球王国時代の国王の末裔尚家の持ち船に無賃で乗れるということで、1904年6月に伊波の帰省とともに沖縄に渡ったのである。

那覇到着後、まずは首里の伊波の家に滞在し、伊波の案内で本島一帯の調査をおこなった。市内では首里城見学や那覇港の御物城（おもものぐすく）での陶磁器調査をしたり、夜は沖縄芝居をよく鑑賞したようである。本島では現在的那覇市で城嶽貝塚、北中城村（当時中城間切）で萩堂貝塚を、石川市（当時美里間切）で伊波貝塚、具志川市（同名間切）で散布地を発見した。伊波貝塚では小発掘をおこなったようであるが、これが沖縄における最初の考古学的発掘である。また、萩堂貝塚の調査の際には貝塚の崖上に住んでいた安里徳仁という当時15歳の少年に現地を案内してもらっている。この少年はその2年後にアメリカへ渡航し、戦後数十年後にこの地に帰った。私が1975年頃お会いした際に「少年の頃、小学校の先生からの指示で東京から見えた鳥居先生を自分が案内した」と誇らしげに語っていた。ところで鳥居は戦後の回想記ではすべて「那覇で貝塚を発見した」とし、（ ）を付して「後にこの貝塚は松村瞭氏、大山公爵も発掘された」と記している。松村は萩堂貝塚を、大山は伊波貝塚を発掘しているので、鳥居がいずれも那覇市としているのは誤記で、1905年の一連の文献の記載が正しい。

さらに鳥居は伊波と別れて宮古島に船で渡り、数日間滞在して御嶽や民謡などを調べて、さらに石垣島に渡った。『鳥居龍蔵伝』を著した中蘭英助は八重山調査で伊波との語らいを想像して書いているが、伊波は宮古・八重山には同行していない。そして川平村の獅子森（岡）と四力村西端においての遺跡を発見した。獅子森の遺跡（現川平貝塚）では小発掘を実施しているが、これが八重山で実施された最初の考古学的発掘である。

鳥居はさらに西表島と与那国島に渡った。与那国島ではわずか1泊だけであったため精力的に各集落を巡り、家屋衣服等を写真に納め、夜は宿泊所で言語や説話を聞き、あるいは曲玉などを観察した。翌日は船で那覇に向かい、再び伊波宅に数日滞在した後に東京へ帰っている。

鳥居の琉球先史文化系統論

沖縄調査の翌1905年、本稿の冒頭に記したように鳥居は連続して同じ内容の論考を異なる三つの学会誌に掲載した。内容は沖縄本島における調査成果とその系譜をめぐる論考である。さらに同年の暮れに八重山の石器時代について発表している。

本島での調査成果については、発見された四箇所の遺跡、遺物を紹介し、その系譜が台湾とはまったくつながらないこと、日本の石器時代土器と同一系統に属するとの見解を示している。さらに当時の主流である人種論を展開し、考古資料の類似、非類似を根拠とし、あるいは現代琉球人の多毛性などをとらえて、アイヌとの強い関係を説いている。

一方、八重山の調査成果については石垣島川平貝塚の小発掘の結果から、その系統や時代を考察している。土器については無文様であることを指摘した上で、注目すべきこととして土器の両端に「耳」の付着していることを挙げ、これに「外耳（そとみみ）土器」の名を与えている。鳥居はこの遺跡を評価して「この遺跡を残したる人民は、石器時代の人民にして、石器、貝器を日用の利器とせしものたるや明らかなり」と述べている。鳥居は八重山に渡る直前に沖縄本島で萩堂貝塚や伊波貝塚などを調査して有文土器を実見しており、その情報に基づいて「・・・この遺跡は、沖縄以東の遺跡と全く性

質を異にするものにして、今先づこれを別種類のものとして見るを最も適当なりと信ず。遺跡の同一ならざる事は、即ち其種族の異なることを示すものにして、余はこの点に於て、有文土器を残したる者と、外耳土器を残したる者と、全く人種を異にする者と考ふるなり」としている。

鳥居はさらに結論でも繰り返して「石垣島にこの遺跡を残したるものは、学問上、沖縄本島以東の其れと全く性質を異にするものにして、従て、其住民も又別派の種族たると推測せらるゝなり、果たして然らばこの住民は毫も本邦内地の石器時代住民と關係を有せざるものにして、本邦的の遺跡は実に沖縄本島附近にて跡を絶てりと云ふ可し、この事實は決して輕々に看過すべきものにあらず」と強調している。

八重山の石器時代の年代については「何つの世のものなる乎・・・(中略)・・・いともいとも知らまほしき事なり」であり、川平村、四ヶ村両遺跡とも中国青磁を伴っていることを年代解明の手がかりとして挙げている。青磁が確かに包含層中に共伴することを確認して、「余はこの石器時代の遺物と、青磁とは全く同一人民の手に由て造られたるものにあらざることを信ず、されどこの二者はともに正しく包含層に、將た、貝塚中に存在するを堅く信ず。さればこの二者はよし程度の大に相異なるものなりと云へども、同一時に使用せられ、後ともに此処に包含せられたりと考ふるものなり、而して、其青磁は他より此処に輸せられたるものにして、石器時代の人民はこの輸入品の青磁を得、其當時にこれを使用せし者ならん」と述べて、青磁の示す年代がこの遺跡の年代であると主張している。そしてその年代推定の手がかりを沖縄本島那覇市の御物城（おものぐすく）出土の青磁に求めた。鳥居は伊波普猷とともに採集した御物城の陶磁器を寺山啓介に見せ、これは広東の青磁で15・16世紀に属するものであるとの見解を得た。加えて、伊波から当時は琉球が海外交易を盛んに展開した時代であったことを教えられ、御物城のそれはこのような活動を示すものとして理解した。そして、八重山の青磁も類似していることから、同様にその年代は15・16世紀でとした。鳥居はこの年代を踏まえて、八重山の石器時代を次のように理解した。

① 石器時代の住民は現今の八重山島民である。

② 今日の八重山島民は15・16世紀の頃、未だ石器時代の段階にあった。

そして鳥居は今後の研究の方向性を示して、「この石器時代遺跡は本邦のものと更に關係なければども、今後研究すべきは台湾の石器時代の遺跡なりと云ふべし。未だ輕々に断言なし能はざれども、八重山の其れと、台湾の其れとは、今後に比較研究すべき、一大宿題ならん」と結んでいる。石器時代文化は沖縄本島までは日本的なるものすなわち現在でいえば縄文文化の系統に含まれるが、八重山のそれは全く別の系統で、台湾などさらに南方の文化との比較研究が重要だとする鳥居の見解は、現在も通用するものであり、すでに沖縄考古学の開始期から指摘されていたことに大きな意義がある。

鳥居の南北琉球文化の比較資料の問題点

しかし、その後の沖縄考古学の研究の進展によって、実は鳥居が信じた川平貝塚や四ヶ村西端遺跡は、現在の八重山編年では「スク時代」にあたり、鉄器や陶磁器をともない、農耕が行われている点などからも沖縄諸島のグスク時代にはほぼ相当する。「外耳土器」と名付けられた八重山式土器も、その系譜は南方ではなく、滑石製石鍋の影響を受けた沖縄グスク土器と同様に、北の系譜につながる可能性が指摘されてきている。したがって、鳥居が比較した遺跡や遺物は、八重山の石器時代以来のものではないのである。鳥居が川平貝塚を15・16世紀としたのは概ね正しい。本人も「年代の余りに新しきこと」という認識はもっていたが、むしろこの点を現代の八重山島民につながることの根拠として用い、この時代は未だ石器時代であったという見解を示しているのである。確かに、この時代は実際

に石斧も貝器も出土し、貝塚も残しているので、石器時代の生活スタイルも継承していた。

いずれにせよ、鳥居が比較したのは相互に時代と文化段階の異なるものであり、比較すべき八重山の新石器時代遺跡は戦後になってから初めて発見されたのである。それにもかかわらず、鳥居が指摘した北琉球と南琉球の文化内容と系統の相異は、石器時代については有効である。先史（石器）時代には北琉球と南琉球に、それぞれ系統の異なる文化が存在したことを明らかにした鳥居の説は、今日までの琉球考古学研究の方向を示した貴重な道標であった。私は、南北両先史文化の境界線である沖縄島と宮古島間を、あたかも生物学における渡瀬線のごとく「鳥居線」と名付けてはどうかと思っている。

伊波普猷の日琉同祖論への影響

鳥居の沖縄調査には伊波普猷の協力が大きかった。両者は東大においても親密な交流をしており、沖縄本島の調査には伊波が案内役を務めている。当時の人類学・考古学は石器や土器の類似・非類似ですぐに人種論を展開する風潮にあり、鳥居もこれを得意とした。1905年に発表された沖縄本島調査に関する論考で展開されているような、日本と沖縄とのヒトの形質や考古資料などのさまざまな類似を伊波も直接聞かされたことであろう。鳥居の見解が伊波の日琉同祖論に確信を与えたことは、すでに先学が明らかにしていることである。なお、東大人類学教室の戦前の考古資料が、現在同大の総合博物館に保管されているが、そのなかに「伊波普猷」の名が付された土器がある。おそらく伊波が寄贈したもので、人類学教室との交流関係を示すものともいえる。

『有史以前の日本』における鳥居の見解の変化

鳥居の人類学研究の中間的総括ともいえるべき『有史以前の日本』が1918年に刊行されたが、ここでは1926年の改訂版に基づくこととする。この本はこれまでの論考を収録したもので、沖縄調査の二論考も含まれている。ここで注目されるのは、よく指摘されるように八重山の石器時代住民の系統について、台湾など南との比較研究の重要性を正しく指摘していたにもかかわらず、「・・この相異はあたかも日本内地に於けるアイヌの石器時代遺跡と吾人祖先の先駆者（固有日本人）の弥生式土器使用石器時代遺跡と相異して居るのと全く同一である。而して八重山の遺跡は我が先駆者の遺跡と同一であって、しかもその土器の形式はまさしく弥生系のものである。この事実からすれば、八重山の石器時代民衆は吾人の祖先と同一であって九州あたりから古く此処に移住して来たものであろう」として、南方への視点を撤回していることである。

これは、弥生時代の研究が進み、八重山の年代値により近い時代の文化と比較するという方法に伴って、必然的に弥生時代文化に結びついたということではないようだ。おそらく、沖縄が次第に日本の近代国家の枠組みの一部として同化されている過程のなかで、鳥居もまた「日本国民としての沖縄人」を意識し、学問的にもそれを裏付けするという心情をもつに至ったのではないだろうか。鳥居は日本国家が侵略していったアジアの近隣地域をよく調査したが、多くは現地統治機関の協力を得る立場にあったことから、国家にとって沖縄は人種的にも文化的にも「異域」であってはならないという同化政策を理解しようとする立場にあったといえる。

晩年の回顧 『ある老学徒の手記』

鳥居は東大人類学教室標本整理掛の職から、沖縄調査の論考を発表した1905年には東大理科大学の講師となり、1922年には助教授となって坪井正五郎の跡を継いで人類学教室の主任となって研究を推

進していった。しかし有名な1924年の「松村瞭学位審査事件」をきっかけに東大を辞職した。國學院大學や上智大学の教授を務めながら海外調査を精力的にこなしていたが、1939年に中国の私立燕京大学の客座教授に招かれ、戦中、戦後も滞在した。中国革命の後もしばらく残っていたが、1951年81歳の時に日本に帰国した。そしてNHKのラジオ番組で研究の回想を語ったりしていたが、同時に自伝ともいえるべき『ある老学徒の手記』をまとめ1952年11月には校正を終えた。その直後風邪から肺炎を併発し、翌年の1月には悪化したため、出版社では急いで試し刷りの本を造り病床へ届けた。鳥居は出来上がったばかりの自伝を手にして間もなく、1月14日に生涯を閉じた。この伝記は日本時代の記録で、続編として中国燕京時代のことも計画されていたが、逝去により実現しなかった。

鳥居の宮古・八重山調査以後約50年間、同地域における考古学調査は途絶えた。次に調査が行われたのは金関丈夫、國分直一らによる波照間島下田原貝塚の発掘で、戦後の1954年のことである。鳥居の回想では先に指摘したように荻堂貝塚や伊波貝塚を那覇市とするような勘違いもみられる。しかし、『有史以前の日本』で急に日本の弥生文化と強引に結びつけた見解は消え、今度は当初の説の通り台湾との比較研究の重要なことを説いている。また、陶磁器の出土するレベルは貝塚の上層として扱い、その下層は宋代以前のものであることは明らかだとしている。

鳥居龍蔵の顕彰

鳥居の全著作は没後に『鳥居龍蔵全集』全12巻、別巻1巻として1975~77年に朝日新聞社によって刊行された。また、出身地の徳島市には1964年に「県立鳥居記念博物館」が開館し、鳥居の業績や収集した資料の一部が展示されている。また、翌1965年に同館内の鳥居博士顕彰会によって『図説鳥居龍蔵伝』が刊行された。同館では1970年に『鳥居龍蔵博士の思い出』も出版している。次男の龍次郎氏が同館を運営する鳥居記念振興財団の事務局長を務めておられたが、数年前他界された。なお、鳥居龍蔵夫妻の遺骨は、この記念博物館構内のドルメン型墓碑に納められている。

東大人類学教室に保管されていた蒐集資料は、すべて国立民族学博物館に移管されている。また、鳥居がアジア各地で撮影して残した写真乾板は膨大な数にのぼるが、東京大学総合研究資料館（現博物館）は文部省科学研究費助成で「鳥居龍蔵写真資料研究会」を組織して整理し、1990年に『東京大学総合研究資料館所蔵鳥居龍蔵博士撮影写真資料カタログ』4部作を刊行した。さらに同資料館では特別展示「乾板に刻まれた世界一鳥居龍蔵の見たアジア」を翌1991年に開催し、同名の図録も同時に刊行した。

さらに国立民族学博物館では共同研究「鳥居龍蔵の見たアジアの研究—写真と標本分析を中心に」を実施し、その成果を所蔵標本とともに1993年3月に企画展「民族学の先覚者 鳥居龍蔵の見たアジア」を開催するとともに、同名の図録を刊行した。

そして同年の10月には出身地徳島県の県立博物館において「徳島の生んだ先覚者鳥居龍蔵の見たアジア」展が催され、同時にその解説書（図録）も刊行された。

これら一連の資料のなかから台湾関係の写真資料を抜粋して、台湾・台北市の順益台湾原住民博物館において1994年に「跨越世紀的影像・鳥居龍蔵眼中的台湾原住民」展が開催され、同名の図録が刊行された。

中藺英助は『鳥居龍蔵伝：アジアを走破した人類学者』を1995年に岩波書店から刊行している。また、鳥居の自伝『ある老学徒の手記』は親戚筋の鳥居貞義氏により、同氏の取材記録や中国時代に親交のあった人たちの横書きの追想記の付録を新たに付けて、2003年に復刻版が刊行された。

（あさと しじゅん：所長）